
消えた主人公は創造神

HOHJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた主人公は創造神

【NZコード】

N8196

【作者名】

HOHO

【あらすじ】

ちょっとオタクっぽい普通の高校生の明神天斗みょうじんたかとが自分の正体は創造神さつぞうしんと知つていろんな世界に行くお話です。

処女作なので誤字や脱字もあると思います。その時は、ご指摘下さい。

あとこの作品は作者の自慢で書きます。 暖かい目で見て頂けると幸いです。

わざわざの作品はオリジナリティです。

それが嫌いな方は、レターンして下さい。

あと不定期ですができるだけ更新していくのでよろしくお願いします。

プロローグ1（前書き）

馴文ですがよろしくお願ひします。

プロローグ1

天斗 side 僕は明神天斗みょうじんたかと ちょっとしたエロゲや漫画、アニメ、ゲームが好きな普通の高校一年生だ今白い部屋で光りに包まれてる。今起きた事を整理しよう。

いつも通り学校に行きいつも通り家に帰つて少し勉強して7時頃に飯を食べ、8時頃にエロゲのあか坂を初めミコトさん が終わつたので眠りに着いた。

ふつと目が覚めるとそこは白い部屋だった。辺り一面真っ白で何もない部屋で独でいるにわづらい場所だった。

「あれ? 起きたはずなのに辺り一面真っ白だ。まだ寝るのかな?」

そう思つていると目の前が光りだした。

巻頭に戻るが光りが治まるとそこには白い髪、白い髪、白い衣装に身を包んで三本の木が絡みあつたような杖を持つた爺さんがいた。

天斗「何だこの「我是神じや」とか言いそうな爺さんは

? 「そつじやは神じや、そしてあなたは、創造神です。」

天斗「つまり話しをまとめると、あなたは、ゼウスで俺は、創造神で、此処は、俺の仕事部屋で、俺は、「人間に近い状態で地球に創造神だった時の記憶を封印して行つて人間として暮らすから俺が、15なつてから連れ戻してくれ」と言って人間界の地球に行つたと」

ゼウス「はいそうですそして私や他の神ケ、そしてほとんどの世界は貴方様がお造りになつた物です」

天斗「それで、それを信じられるだけの証拠はあるのか?」

ゼウス「ならば、私では、完全に解く事はできませんが、記憶の封印を解きましょう。」

天斗「わかつたそれでいい」

ゼウス「分かりました、それでは行きますよ、それ!-!」

ゼウスは、そつ^{ソフ}と指をパチン!-!と鳴らした。

すると頭の中にいろんな情報が流れ激しい頭痛に襲われた。

天斗「あ・・・・たまが・・・・割れ・・・・る」

天斗「あ・・・たまが・・・割れ・・・る」

今、私の目の前で創造神様が頭を抱えながらつづくまつていま
す。

天斗「ぐああああああああ

そろそろ治まる頃ですね。

天斗「ハア・・・・ハア・・・・ハア・・・・」

天斗「そうか、だいたいのことはわかった」

ゼウス「そうですか、じゃあ仕事をしましょ」

天斗「嗚呼だがその前に、記憶を戻そう」

そう言つと創造神様は、指をパチンと鳴らしました。

天斗 side

正直言つてゼウスの言つてたことは半信半疑だつたがどうやら本当
のようだ。

今、ゼウスに記憶の封印を少し解いてもらつて確かめた。

そして自分で記憶の封印を完全に解いた。

天斗「よしこれでいい、ゼウス仕事しよ」

ゼウス「では、これが今までの書類です」

天斗「マジでか?」

ゼウス「ええそうですよ、何たつて15年分ですから」

天斗「まあそれは、いいとしてお前いつまでその格好のつむりだ?
元の姿に戻れよ」

「つーかなんでそんな格好してんだ?」

ゼウス「それは、記憶が戻る前の貴方様に信じてもらえるようにで
す」

天斗「人の心を読むな、それと敬語使わず昔のように喋つてくれそ
れから元に戻れ」

ゼウス「分かりました」

ゼウスは、そう言つと光りを放ち光りが治まるとそこには、見た目
高校生で、背が170cmぐらい、茶髪に、瞳も茶色策略を張り巡
らせてそうな（まじ）いの直江大和みたいな感じ）やつになつた。

ゼウス「これでどうですか？創造神様」

天斗「なかなかいい姿になつたな、それと昔のように話せそして今
度からは、『天斗』と呼べ」

ゼウス「わかつたよ天斗」

天斗「よし、じゃあこれから仕事しよう」

ゼウス「では、頑張りますか」

こうして再び俺創造神としての人生（神生_?）が始まった。

プロローグ2(前書き)

プロローグです。

プロローグ2

天斗 side

あれからいろいろ有つてだいたい300年程たつた。

えつその間の事教えろつて？まあ大まかな事を教えよう。

まずあれから書類をかたづけたあといろんな神ヶとあつた。

例を挙げるなら、ガイア（天空）やウラノス（大地）、アテナ（知恵）にアポロン（芸術）とか、イシス（魔法）、ジーク・ハルト（時、魔力全般の神）、アモン（破壊神）などまだまだ居るが今はこのぐらいだ。

それから、ゼウスを最高神にした。正直厄介ごとを押し付ける為だ。これでゼウスを入れて最高神はアモン、俺、ゼウスは三柱目だ。
一番大事なのは、ほとんど修行に時間を使つた事だ。

理由は、地球に行つたとき人間の身体になつて連れ戻されたとき新しい神の身体になつたら能力が下級神ぐらいしかなかつたから。

でも今は、槍術、剣術など武術は、f a t e のサーヴァントよりも強くなつたし、魔法や魔術などは、最強になつた。（ジークよりも強くなつた）

それと、そろそろある計画を実行したい。

だから、今久しぶりに神の会議に出席している真つ最中だ。

天斗 side out

ゼウス side

何やらめずらしく天斗が出席しているがずっとと考え込んでいる。

まあこんな時期に会議に顔を出したんだ何かいい提案でもあるのでは
しょう。

ああこんな時期というのは、今問題になつていてる各世界のバグについて
今回で調度30回目の対策会議でもあるからだ。

ジーク「では、世界運営対策会議を始める」

ジーク side

ゼウス side out

ジーク「では、世界運

営対策会議を始める」

俺の言葉とともに、出席している神達が静まり返る。

今回会議に出席しているのは、最高神3人と、俺、ガイア、天照大
神、須佐之雄

座敷童子、アスクレピオス、夜刀神、ハーデス、ホルス、

月夜見

の13柱だがめずらしく天斗がいる何か考え込んでいるから何かいい
案があるのだろう。

ジーク「まずは各世界の状況の報告を頼むハーデス

ハーデス「はいでは、報告します」

報告中

と言つわけで一部の世界以外は、何の問題もありませんが、その一部の世界は、バグの侵攻が進んでいます」

ジーク「わかつたもういじぞ」

ハデス「分かりました」

ジーク「では、対策について案がある方は、お願ひします」
するとアモン殿がどうでもよさそうに「うう」と言つた。

アモン「面倒くせえからその世界全部消そうぜ」

ジーク「駄目です、そんな事したら世界全部のバランスが崩れてしまい全部の世界が滅びてしまいます」

ガイア「いつその事全部造り直してはいかがですか?」

ジーク「どれだけの時間と労力がいると思つてるんですか」

「「「「「「「「「「「う～ん」」」」」」

天斗「馬鹿かお前ら」

ジーク side out

天斗 side

天斗「馬鹿かお前ら」

どう

も今回の会議は、いろんな世界で出来たバグへの対策案が主なものらしい。

だがさつきから世界壊すだの造り直すだの言つてゐる。

まあいい俺の計画のために利用しよう。

「どういつ事ですか?」「簡単だ」

「何が簡単何ですか!..」

「誰かが世界を渡つてバグを直せばいい」

「何言つてゐんですか、みなさん仕事や書類でそんな事出来ませんよ」

〈計画通りだ〉

「なら俺が行く」

「貴方はたくさん仕事があるでしょ?」

「新しい世界を創らなければ書類なんてほとんどない、それに誰か代役がいれば問題無いだろ」

「分つた、それにバグの侵攻が進んでも大変だからな」ジークは諦めたかのようにそう言つた。

「じゃあこれで行こ?、それと代役はジークお前がやれ

「仕方ないなでは、次何か報告はあるか?」

天照「確かエウリュアレーとステンナーからメドウーサが行方不明

だと報告があるので~」

須佐「そつ言えばヘラクレスもいなくなつておる」

天斗「それについては俺に心当たりがあるから任せろ」

ジーク「もつほかに無いな、ではこれで終わりにしよう、『解散』」

天斗 side out

ジーク side

俺は会議が終わり部屋に戻るとそこには一人の女がいた。

？「会議はどうでした？」

部屋にいた女はそう言つてきた。

ジーク「ああイシスお前か」

彼女は、イシス俺の妻であり下級神の一人だ。

イシス「ええあなた、それからどうでした？」

どうやら会議の事が気になるらしくそう聞いてきた。

ジーク「ああやつと解決策が出た」

俺が答えるとこう聞いてきた。

イシス「どんな方法ですか？」

イシスは興味深そうに言つた。

ジーク「天斗が異世界を渡つてバグを直すらしい」

俺はそう言つとイシスは、珍しそうに イシス「創造神様直々にで

すか？」

と言つた。

ジーク「何を企んでいるか分からぬが仕方ないだろ？」

俺が不安要素を言つとイシスは、少し楽しそうに

イシス「そうですね、の方はたまに我々が思いもしない事をなさりますから

そう言つて笑つた。

ジーク side out

天斗 side

俺は、会議が終わつてすぐに部屋に戻り準備を始めていた。

例えば金ピ力な人の王の財宝の倉庫バージョンに必要な物を詰め込めたり、行く世界を決めたりしてただけだ。

荷物を詰め終わつてすぐに世界を渡ることにした。

天斗 side out

? ? ? side

私は、天斗様の付き人をやつている神でラス・ブーチンといいます。

今天斗様は、いろいろな物を空間倉庫に次から次へと入れています。

何でも天斗様は、これから世界を渡り歩くようです。

あつ今仕度が終わつたようです。

ブーチン side out

天斗 side

仕度が終わつたからこれから世界を渡ろうと思つ。

「おいでブーチン俺をf a t eの世界に飛ばしてくれ」

今俺の近くにいるブーチンは、確かに天界から他の世界に飛ばせる神で俺の付き人をやってる神なのだが何の神だったか忘れた。

「では、行きますはあ！！」

ブーチンがそう言つと俺の足元に魔法陣が敷かれ光り出すと俺の意識が薄れて行つた。

天斗 side out

光りが消えるとそこにはもう天斗はいなかつた。

主人公設定

明神天斗

みょうじんたかと

創造神

最高神の一人で最も偉い神。

暇な為人間に近い状態で地球に行つて15年後天斗の部屋に戻つて
きた。
300年の間、修行をして今は、神の中で一番強い。

能力紹介 (f a t e風)

CLASS: JOKER

ジョーカ

マスター: ????

真名: 明神天斗

性別: 男

身長178cm

体重53Kg

イメージカラー: 虹

特技: ゲームの攻略

好きなもの：からかあこと、パクリのセリフ、

嫌いなもの：気持ち悪いもの

属性：中二、混沌、神

筋力：EX

魔力：EX

抗魔力：EX（調整可）

耐久：EX

幸運：?

敏捷：EX

宝具：EX

スキル

創造EX

すべてのものを造り出せる。宝具の能力なども再現出来る。

心眼EX

300年の間神ヶとの修行で手に入れた最高クラスの心眼。

パクリ技EX

知っているアニメや漫画、ゲームなどの技や能力がすべて使える。

神の身体EX

技や能力によるリスクや後遺症がすべて無効になる。

宝具

王の財宝ゲートオブバビロン

天斗が倉庫がわりに使っているがちゃんと宝具の原点が入っているみたいだ。

コレクション宝具

柳生十兵衛の愛刀とされる刀（典太）にイザナギに殺されたカグツチの魂を宿した物、普通の刀の見かけの時は、典太本来の力しか無いがカグツチを纏わせると刀身が紅く燃えるような色になる。（真名解放可）

容姿

戦場のヴァルキュリアのエイリアスの髪を肩甲骨辺りまで短くして黒髪黒目にして後ろで縛ったかんじ。

たいがいはこの格好だが世界を渡ると違う姿になつたりする。

和服に新撰組の羽織りを着ているときは、帯刀している。

f a t e編第1話（前書き）

5000アクセス突破しました。
ありがとうございます。

そしてこれからもよろしくお願いします。

今、冬の海に向かつて落ちる神が一人いた。

天斗 side

今俺は100mぐらいの高さから真下の海に向かつて落下中だ。
何故こうなったかと言つとあのプーチンが俺を海面から150mぐら
ーいのところに転移させたからだ。

「糞あの馬鹿プーチンめ神界に戻つたら覚えてろよ~」

そんな風に落下していると下に魔法陣みたいなのが出来て光り出
した。

「これは、サーバント召喚の陣だ」

そつとうと光りに包まれて転移した。

天斗 side out

? ? ? side

僕があかさかのミコトをやり終わったら部屋の真ん中に魔法陣が
出来て光り出したら急に意識が遠退いて逝った。

? ? ? side out

天斗 side

光りがあさまたので辺りを見渡すと一人の少年がパソコンに向かって座っていたので声をかけてみた。

「問おう貴方が俺マスターか?」

「・・・・・」

答えない。

「もう一度問おうお前が俺のマスターか?」

「・・・・・」

また答えないで不信に思い彼を搔きぶると彼は、崩れ落ちた。

「マジでかこれは洒落なんねえぞおい」

そう彼は、死んでいた。

びつじょつじれでは、聖杯戦争に出れないじゃないか。

いやまたよここれはチャンスだ、今から他のサーバントが戦つてると
きに介入してマスターと契約すれば、とくに凜もしくは士郎と契約
できれば儲けもんだ。

よしそうと決まれば行動有るのみだ。

天斗 side out

凜 side

私は衛宮君を教会を出たあと少し話していた。

「話戻るけど、明日からは敵同士なんだから手加減しないわよ」

「「じんばんは監さん。お兄ちやんはいつして念つのは一度田だね」と近づいてくる田人と少女。がいた。

少女の方は、130くらいしかない身長。腰まである白い髪、赤い瞳。紫のダッフルコートに白いマフラー。

巨人は250センチ以上の大きさ。瞳は黒点がなく赤い。髪は無造作に伸びた黒で、ざつくばらんに切られている。

肌は浅黒く。ものすごい筋肉だ。

腰にだけ、甲冑のような服を着ている。腕にはギザギザとした2メートル近くある大剣。

少女は行儀よく裾を持ち上げて、上品にお辞儀をした。

「はじめまして、わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

「アインツベルン」

凜 side out

イリヤ side

「「じんばんは監さん。お兄ちやんはいつして念つのは一度田だね」少女は行儀よく裾を持ち上げて、上品にお辞儀をした。

「はじめまして、わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

そう言って挨拶するとセイバーが見えない剣を構えた。

「アインツベルン」「
「やば。あいつ、桁違いだ」

「じゃ、殺すね。やつちやえ、バーサーカー」

少女が楽しそうに言つた瞬間、バーサーカーは飛ぶ。

「シロウ、下がつて……！」

あの巨体で数メートルの距離を飛ぶ。その落下地点に、セイバーがちょうど走り、

閃光。

二人が剣と大剣を叩きつけ、空気がビリビリと震える。

更に旋風のようなバーサーカーの大剣がセイバーを追隨する！
大剣をバーサーカーは自由自在に振りまわし、セイバーに叩きつける。

かろうじで、セイバーは不可視の剣で抑えるが、次第に押されていき、セイバーは吹き飛ばされる。

更に追隨。

避ける暇もなく、絶え間なく降り続ける大剣。

地面を碎き、木をなぎ倒し、まるで嵐のような剣筋。
セイバーがもう一度大きく吹き飛ばされる。

そのまま追隨し、立ち上がれないセイバーに幾条もの攻撃を浴びせる。

セイバーは血だらけになりながらも、立ち上がる。勝てないとわかりながらも、防ぎよつのない攻撃をひたすらに受けた。

「合じ」とセイバーの体が後ろにずれ、沈む。大きな横合いの一閃。

セイバーは大きく吹き飛ばされる。宙に舞つ体と潜血。常人なら死んでいるだろう。

それでも、剣を地面に突き立て立ち上がる。
「……くつ……シロウを守る……」

「セイバー逃げる！」

土郎が叫ぶ。

黄金の剣を携えた少女を。

セイバーは剣を頭上に掲げている。立つているのすらキツイ少女が、威風堂々と立ち上がる。

そしてまたセイバーが、吹き飛ばされた時バーサーカーが止めた一撃を放つた瞬間田を閉じた。

「108マシンガン」

その声を聞き田を開くとそこには、物凄い速さの蹴りを放つ同じ年くらいの少年がいた。

凜 side out

第2話（前書き）

もうすぐ1万アクセス突破です。

ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

でわ本編どうぞ

第2話

時は、少し遡る。

高いビルの上で周りを見渡すサーバントが、一人いた。

天斗 side

あれから俺は、ビルの上に来ていた。

「うーん何処かにサーバントいないかな？」

こんな感じに捜していたら懐かしい感じのする気配がしたので、隣町の方を見ると、閃光が、教会の近くで起こっていた。

「むつあれば、ヘラクレスか、よしあれに割つて入ろう」

「決まつたし行くか

そしてヘラクレスのところに着くとセイバーがやられるとこひだつたので割つて入ることにした。

「108マシンガン」

天斗 side out

セイバー side

あれからバーサーカーと打ち合つていましたが私が片膝を付いて立

ち上がったときバーサーカーの一撃で吹き飛ばされてバーサーカーを見ると止めの一撃を放とうとしていた。

「駄目ですね此処までのようです、すみません土郎」

そう思い眼を閉じた時だった。

「108マシンガン」

その声の方を見ると黒髪黒目の中年がバーサーカーを蹴り飛ばしていた。
セイバー side out

イリヤ side

バーサーカーがセイバーに止めの一撃を放とうとした時だった。

「108マシンガン」

その声とともにバーサーカーが蹴り飛ばされた。

イリヤ side out

天斗 side

うん108マシンガンが綺麗に決まった。

そんな事を思つてみるとクラクレスが立ち上がりこつちを見ていた。

「久しぶりだなクラクレス、いつちやるか？」

そう言つとヘラクレスは、剣をとり構えた。

すると凜が呟いた。

「ヘラクレス、ギリシア最大の大英雄じやない」

天斗 side out

凜 side

「ヘラクレス、ギリシア、最大の大英雄じやない」

思わず呟いてしまった。

凜 side out

天斗 side

凜が呟いてから俺も構えを取つてこう言つた。

「いざ尋常に」

それに合わせるようにヘラクレスがほえた。

「

その瞬間ありえない速度で大剣振り下ろし襲い掛かつて來た。

俺は、それをカグツチ（見た目は、典太）で受け止め、弾き返し、袈裟切りで返すとヘラクレスはそれを大剣で受け流し反撃をし、また俺がそれを受けて反撃する。

それを数十合繰り返してヘラクレスの渾身の一撃を避けるために後ろに飛び距離を取つて言い放つた。

「次で最後だ」

そう言つて力グツチを平突きの為に腰を落とし頭少し上に構えあの言葉を口にする。

「悪・即・斬」

そう言つとヘラクレスも気付き距離を詰める。

天斗 side out

凜 side

「久しぶりだなヘラクレス」

いきなり現れたサーバントがそう言つてヘラクレスと打ち合い始めた。

ガキン キンッ

ドコン ガン カキン

ギンッ キン ドカン

さつきから音と閃光と火花だけがそこに鳴り響きその後には、数々のクレーターが出来ていた。

そんな光景を静かに見ていたら急に剣閃が止み二人が、現れ距離をとり乱入して来たサーバントが頭の少し上に日本刀を構えてしゃべり出した。

「悪・即・斬」

それを聞いたバーサーカーが血相を変えて走り出した。

凜 side out

セイバー side

「久しぶりだなヘラクレスいっちょやるか？」

さつきバーサーカーを蹴り飛ばしたサーバントがそう言つとバーサーカーが構えた。

そして謎のサーバントが合図をした。

「いや尋常に」

バーサーカーはそれに答えるようにほえた。

「 」

そして二人は、それこそランサー並の速さで打ち合い始め大剣と日本刀がぶつかり合う度に火花が散つた。

そしてバーサーカーが渾身の力を込めた一撃を放ちそれを謎のサーバントが避けるために後ろに飛び距離をとりしゃべり始めました。

「悪・即・斬」

そう言つて頭の少し上に突きの構えを取るとバーサーカーがそれを阻止しようと走り出しました。

セイバー side out

イリヤ side

私は、今信じられないことをめにしているわ。

最強のサーバントのはずの私のバーサーカー、ヘラクレスがさつき割り込んで来たサーバントと打ち合っている。

ありえないバーサーカーは、知性や理性を失う変わりに桁外れの攻撃力を手に入れてるのにあのサーバントは、普通にヘラクレスと打ち合っている。

「私のバーサーカーは、ヘラクレス、ギリシア神話最大の大英雄よ、そのヘラクレスが知性や理性を捨てて攻撃力を得たのにあのサーバントは、普通に撃ち合えるなんて何処の英靈なのよ」

いつのまにか声に出ていた。

ヘラクレスとあのサーバントが離れたそうするとあのサーバントが構えを変えてしゃべり出した。

「悪・即・斬」

すると知性の無いはずのバーサーカーが走り出した。

イリヤ side out

天斗 side

ヘラクレスが突っ込んでくるがもう遅い。

俺は、光りを越える速度で平突きを放った。

「喰らえ」

「牙突」

そう言つて俺は、牙突を繰り出した。

天斗 side out

士郎 side

俺は、遠坂と教会で聖杯戦争に参加することにして遠坂と話し合つていたら250cmは、ありそうな巨人が襲い掛かつて来てそれをセイバーが受け止めたが撃ち合つ内に吹き飛ばされバーサーカーと呼ばれた巨人が止めを刺そうとした時バーサーカーが蹴り飛ばされた。

そしてその蹴り飛ばしたおそらくサーバントと思われる男と撃ち合이が始まり、そして二人が離れると片方は、いつの間にか日本刀を持つていて頭の少し上で構った。

「牙突」

そう叫ぶとそこにはいつは、いなかつた。

士郎 side out

アーチャー side e

私は、今信じられない光景を目にしている。

それは、バーサーカーとともに撃ち合っているサーバントがいることだ。

サーバントが近くにいるとわかつた瞬間にこの丘に来たが、セイバーがやられる間際にバーサーカーを蹴り飛ばして今もランサー並の速さで撃ち合っている。

バーサーカーが渾身の一撃を放とうとした時謎のサーバントが後ろに飛び距離をとり何か言って私の目でも追えない速さで攻撃を仕掛けた。

アーチャー side out

第2話（後書き）

カグツチは、イザナギに殺されたイザナミの子供です。

そのカグツチを天斗の創った典太に魂と能力を一緒に入れた刀です。

典太の説明は、その内します。

第3話（前書き）

いろいろな方からsideが多くて読みずらかったり、この指摘がありまして少なくして書きました。

「指摘ありがとうございます。」

それと、もうすぐ1万5千アクセス突破です。

ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第3話

あれから10秒程たつて砂煙りがおさまった。

セイバー side

私は、その光景に目を疑つた。

そこには、日本刀に串刺しにされ持ち上げられるバーサーカーの姿があつた。

セイバー side out

アーチャー side

丘の上から見ていたがあのサー・バントがバーサーカーを串刺しにしている日本刀を見て目を疑つた。

あのサー・バントが持つている太刀は、典太だつたからだ。

アーチャー side out

天斗 side

俺は、カグツチでヘラクレスを串刺しにして持ち上げていた。

何故カグツチで突き刺したかと言うとイザナギに殺されたカグツチの魂と能力を宿した刀は、彼の有名な典太だからだ。

典太には、邪を払ったという逸話があるからだ。

だから俺は、ヘラクレスの狂化を解くためにわざわざ自分で創ったコレクションを引っ張り出したという訳だ。

「おーへラクレスそろそろ正氣に戻ったか?」

「うう

「はつ、貴方様のような方が何故このようなどころに

「まあ仕事だ

「仕事とは、バグの事ですか?」

「ああそれの事だ

「何故貴方様が直々に出向かれたのですか?」

「手が空いているのが俺だけだったのと半分俺の暇つぶしだ

「そうですかでは、急いでバグの修正をしますか?」

「いや少しこの聖杯戦争に参加するからまだいいそれと今回俺は、サーバントとして出るから普通に話してくれ」「わかつた貴方は昔からそうだったからな

「それとこれから名乗るからそれに会わせてくれあと俺が創造神だつて事ばらすなよ」

「わかった

俺とヘラクレスは、周りには、聞こえない声で会話を終えた。

そして俺は、ヘラクレスからカグツチを抜きこいつった。

「俺は、今回イレギュラーで召喚されたエクストラクラス、ジョーカーのサーバントだ」

イリヤと凜が一いつ言つた。

「そのジョーカーが何で此処にいるのかしら」

「さうよ貴方のマスターの命令?」

「いや俺は、さつさつと言つた通りイレギュラー何だが今回の聖杯戦争には、俺を含めて九騎のサーバントがいる」

俺がそう言つと凜が驚いたように言つた。

「九騎そんなのありえないわ」

「まあありえないかもしれないが、いるからには仕方が無い、話しを戻すが聖杯からの情報によれば俺と別にもう一騎余分なのがいるから俺は、そいつを倒すためによればれたらしい」

（思つきり嘘八）

「まあいいわで、なんでそのもう一騎のイレギュラーを倒すために呼ばれたあんたが私達の戦いに横槍入れてるのか聞きたいわね」

「そんなの簡単だ」

「どうこのつ事か」

「お前らがこんなとひひで戦つてると捜すのに邪魔なんだ」

「くつ」

悔しそうに凜がそう呟いた。

「まあやう言つわけだからここの嬢ちゃんも引いてくれ

「うへんわかった、でも条件が有るわ」

「まあ俺に出来る」となういいが

「簡単よジヨーカーが私のサーバントになればいいだけだから」

END

緊急アンケート実施（前書き）

アンケート御協力お願いします。

緊急アンケート実施

緊急アンケートです

これから話の進行についてアンケートします。

1 これからマスターを凜かイリヤのどちらかにします、どちらにしたほうがいいか聞かせてください。

? 凜をマスターにして桜の救済後セイバールートセイバーと士郎が現代で恋人同士END。
? イリヤ

をマスターにして「BWルート」に進みイリヤの死亡を回避して、ギルガメッシュ撲殺してアーチャーをようなりEND。

期間は、1週間～2週間の間でお願いします。

それでは、アンケート回答待つてます。

これからもよろしくお願いします。

第4話（前書き）

アンケート御協力ありがとうございました。

もうすぐ24万アクセス突破します。

ありがとうございます。これからもよろしくお願ひします。

ある冬の坂道で2人のマスターと3騎のサーバントが固まっていた。

天斗 side

「簡単よジョーカーが私のサーバントになればいいだけだから」

（セービッシュようか？）

（イリヤを助けるならイリヤに付いた方がいいだろ？）

「いい提案だな、ちよびスマスターがぽつくり逝つちまつたしな」

「なら決まりねジョーカー」

（いやまてよ、ベラクレスがいるならギルガメッシュくらい余裕じやねえか）

「いや、やめとく」

「なんで？」

「ベラクレスは、強いからまた戦いたいだけだ」

「まあいいわ今日のところは、面白い物も見れたし帰りましょうバーサーカー」

イリヤは、そう言って帰つて行つた。

(さて問題は、これからだな)

「ちょっとあんた」

(やつぱり来たか)

天斗 side out

凜 side

「ちょっとあんた」

「どうせやつたのアインツベルンとの会話を聞く限りマイシのマスターは、今は、いない。

ところの事は、再契約して私のサーバントに出来る。

そつすればアインツベルンのバーサーカーと互角のコイツがいれば簡単に終わる勝ち残ることが出来るわよね。

「あんた今マスターいないんでしょなら私と再契約しない

ふふ」これで今回の聖杯戦争は、私の勝ちね。

「こややめとくわ」

「じゃあ早速再契約の準備をつてええなんで」

「それは、遠くの丘からヘラクレスもろとも此処ら辺りを吹き飛ばそうとしていたアーチャーとは、気が合わなさそうだからだ」

「そんな事で」

「まあそんな訳だからついのセイバーのマスター俺と再契約してくれ」

私は、その言葉で目眩がした。

凜 side out

士郎 side

「まあそんな訳だからそここのセイバーのマスター俺と再契約してくれ

なんか良く分からないうちに話しが進んでいた。

「なんで俺なんだ」

「それはなセイバーは、最優のサーバントだからセイバーといった方が、目的が果たせそうだからだ、それに寝床が欲しいし美味しい飯が食いたいからな」

「目的と寝床は、いいとしてなんで俺の料理が美味しいと思つたん

だ？」「

「勘だな」

「勘か・・・」

「まあそんな訳だから頼むよ」

「まあやつ言つ」となら仕方ないな

「そりが、なら俺は、ジョーカーのサーバントだよろしく頼む

「ああそりだな俺は、衛宮士郎だよろしくな

そり言つて俺は、ジョーカーと再契約した。

士郎 side out

天斗 side

あれから士郎と無事再契約を交わした。

「士郎つ離れて下さい」

俺が、士郎と再契約して少し話しているとセイバーがそり言つて不可視の聖剣で切り掛かって来たのをカグツチで受け止める。

「おいおいセイバーいきなり切り掛けつて来るなんてどうこいつもりだあ？」

俺は、そう言いながら不可視のエクスカリバーを弾き返す。

「あなたこそどうこうつもりですかジョーカー」

セイバーは、そう言いながら再びエクスカリバーで切り掛かって来るがそれをまた受け止める。

「どうせいつも俺は、士郎と再契約したんだ」

「それは、本当ですか士郎」

「ああ本当だセイバー」

「そうですかなら仕方ありませんですがジョーカーあなたが不信な行動をとったときは、私があなたを切ります」

「ああその時は、好きにしてくれ」

「分かりましたその言葉信じましょ」

「ああそれは、いいとして問題は、あそこで残念そうに落ち込んでるのをどうにかしなくてはいけないよ」

「ええそうですね」

「「「どう訳で士郎頼んだ（頼みました）」」

「なんで俺なんだ？」

「お前が衛富士郎だからだ

「なんだよその無茶苦茶な理由は」

「今考えた

「仕方ない遠坂は、俺が何とかする」

そう言って士郎は、凜のところに行つて話し始めたと思つたら凜は、士郎に「全部あんたのせいだ」と言つてガンドを打ちながら士郎を追いかけ出した。

この晩この隣町に「なんですか」とつ悲鳴とともに破壊音が響いたところ。

第5話（前書き）

約1年も開けてしまいますいません。

凶悪なスランプで全く書けませんでした。

やつと書いたのがこれですが誤字、脱字やおかしなところがあれば
ご指摘下さい。

それでは、本編スタートです。

ある武家屋敷で5人の者達が机を間に挟み会話をしていた。

士「これからどうするんだ?」と士郎の質問に

凜「そうねこれからは、敵どうしなんだから次会うときは、殺し合いう時よ」凜がそう答える。

士「遠坂、オレは、遠坂とは、戦いたくない」

天「そうだな此処は、同盟を組むんだほうがいいかな」

凜「同盟って言つたつて何のために?」

セ「そうですね、バーサーカーやほかのサーク、アントを倒す為といつたところですか?ジョーカー」

天「ああその通りだセイバー」

ア「私もその案には、賛成だな」

凜「アーチャー、あなたが言つなら仕方ないわね」

士「よかつたこれで遠坂と戦わなくてすむんだな」

凜「ええそうよ、といつて今日から私は、此処でお世話になるわね」「そう楽しそうに言つ凜に」と待つてくれ「慌てたように待つたを士郎がかける。

士「ちよつ

凜「何よ」少し不機嫌そうに凜が聞く。

士「此処に住むのは、まづい朝には、藤ねえや桜が来るんだ」

凜「そんなの大丈夫よ」

士「なんで何だ?」

凜「だつてできとうに言つくるるもの、そんなことよりあなたのもう一人のサーバントのことのほうが先よ」

天斗 side

天「何だ?まあ聞きたいことは、分かるんだがな」

凜「あなた何者よ」

少し不機嫌になつたな。白々しく答えて見るかな。

天「何者って言われてもジョーカーのサーバントとしか言えないなあ」

凜「じゃあ何処の英靈よ」

天「あえて何処のつて言つと日本のだな」

凜「そいつ

凜「それで日本、の英靈でそんな羽織りを着ているつてことは、新撰組の誰かつてこと?」

天「さあな、土方歳三かもしれないし斎藤一かもしれない」

凜「へえ土方に斎藤、」

ア「凜、ちょっと待て」

凜「どうしたのよアーチャー」

ア「まだ決めつけるのは、早いぞ凜」

凜「どう言つ」とよアーチャー

ア「何簡単だ、まずそこのジョーカーの使つていた日本刀だ」
凜「何言つてるのよアーチャー、新撰組の誰かなら日本刀を使うのは、当たり前じゃない」

ア「ああ確かに普通の日本刀を使つていればな」

凜「普通の日本刀つてどういふこと」

ア「おそらくジョーカーの使つていた日本刀の銘は、大典太だろう」

凜「大典太？」

ア「大典太とは、平安時代末期の名工光世典太が打つたとされる刀で前田家の家宝で有名な業物だ。」

天「御明答、確かにあの時俺が使つていた刀は、大典太だ」

凜「嘘じやああんたは、誰なのよ、それになんでアーチャーは、その大典太だつてわかつたのよ」

ア「まあ、マスターのせいで記憶が曖昧でな」

天「まあ俺は、新撰組じやないとだけ言つておひつか練鉄殿」

ア「貴様何処でそれを」

天「わあな、ただお前の願いもセイバーの願いもどちらも間違つて
いぬ」

凜「どうごう事よアーチャー」

ア「どうごうとせ?..」

凜「とほけないでアーチャー、あなた自分の記憶がないんじやなか
つたのかしら」

ア「なに簡単な事だ生前私は、練鉄といづれいつぬで呼ばれていたら
しい他の事は分からんこれも君の不完全な召喚のつけだぞ」

凜「うつそれを言われると痛いわね、はあもつにいわ」の話のは
おしまこもう遅いし続きは、明日こしまじょ。」

士「ああそうだな。明日は、学校だしな」

セ「そうですか、なら今日は、此処までこしまじょ」

士「そつまつ」とだから遠坂は、離れを使つてくれ

凜「分かつたわそれじやあ衛宮くんおやすみなさい」

「うして作戦会議は、終わったのだった。

まあこの後セイバーが何処で寝るのかで謎になつたのまさしくないな
ことであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196/>

消えた主人公は創造神

2011年7月16日07時11分発行